

シベリアの狩猟・漁撈民とトナカイ飼育

斎藤 農 二

【要約】 牧畜民とよばれる種族の中には、乾燥地帯で馬、羊その他を飼育するものと、寒帯でトナカイを飼育するものとに大別される。前者が湿潤地帯あるいはオアシスと相接して農耕との関連をもつのに対し、後者は農耕地帯から隔絶して、狩猟・漁撈との関連をもつという根本的な差違がある。

トナカイ飼育がはじまる前の極北のツンドラおよびタイガ地帯では、野生トナカイの狩猟と沿海並びに河川での漁撈が住民の生活を支えていた。トナカイの飼育がはじまったこともこうしたことは本質的には変りがなく、タイガ地帯では運搬用家畜としてトナカイを飼育し、ツンドラ地帯でも狩猟・漁撈の補助としてトナカイ飼育を行なった傾向がよい。

トナカイの飼育がいかんして発生したかについては、不明の点が多いが、ソ連の民族学者の見解によると乾燥地帯の牧畜の影響の下にシベリア南部の地方にはじまった可能性がよい。牧畜を含む中央アジアの文化がシベリアの北端まで及び、その過程でタイガ、ツンドラ地帯の狩猟・漁撈文化を同化し、狩猟・漁撈・トナカイ飼育が有機的に結びついた新しい文化が誕生したと考えられる。

トナカイの棲息圏の南限を境にして、北の狩猟と結びついたトナカイ牧畜圏と南の農耕とのつながりの密接な馬羊の牧畜圏とに大体分けられる。南北にまたがるツングースについてはそのことは、かなり明瞭である。

しかし、シベリアにトナカイ牧畜をもたらした民族のひとつとされるツングースに関する中国の史書による研究では、かれらのトナカイ飼育は、相当古い時代にまでさかのぼる可能性があり、野生トナカイの馴化の過程の実証は、たやすくしないように思われる。

史林 四九卷五号 一九六六年九月

はじめに

牧畜によって生活してきた民族は、世界各地に見られ、

飼育される動物（家畜）にもいろいろある。ユーラシア・

アフリカにかけての乾燥地帯、高原などに馬、羊、ヤギ、

ラクダ、牛（チベットのヤクを含める）などが代表的なもの

のとしてあげられ、これにさらに、ここでとりあげる寒帯のトナカイを加えることができる。

ところで、牧畜民あるいは遊牧民とよばれるものが、いつ、どこで、いかにして発生したかについては、必ずしも定説はないようであるが、乾燥地帯における牧畜は、農耕から分離し、独立したという説が強い。そうした起源論とは別に、事実、乾燥地帯において牛、馬、羊その他を飼育している遊牧民は、ほとんど必ず、オアシスまたは草原と相接する湿潤地帯の農耕民との接触・交渉を歴史的にもっている。それが敵対的な形では、牧地と農耕地との争奪とか、遊牧民の農耕民に対する掠奪、征服として現われ、互恵的な関係としては、畜産物と農産物（穀物・茶・織物など）との交易がみられる。つまりは、乾燥地帯の遊牧民は純粹に牧畜のみによって生活してはおらず、何らかの形で農耕とのかかわりあいを持つことによって牧畜生活を成り立たせていると考えられる。

一方、極北のタイガからツンドラ地帯に居住する牧畜民——トナカイ飼育民——に関しては、農耕とのかかわりあいを直接的な形では見出しがたいように思われる（後述）。

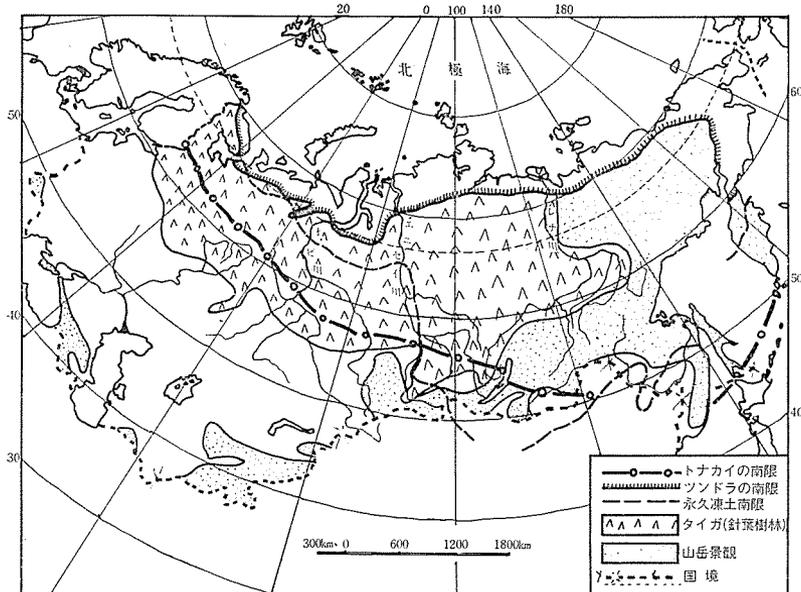
トナカイ飼育民にあつては、むしろ、狩猟・漁撈（海獣狩猟を含む）とのかかわりあいが緊密であつて、ほとんどの場合、トナカイの飼育と狩猟・漁撈とは不可分である。ここに、狩猟・漁撈・トナカイ飼育は、北方の三位一体をなすといわれるゆえんがある^①。

このようなわけで、同じく非森林地帯の開放的な地域——ステップとツンドラ——で群をつくり遊牧をする習慣のある動物——羊とトナカイ——を家畜化していても、乾燥地帯のステップの牧畜民と寒帯のツンドラのそれとでは、かなり性質を異にしているようである。そこで、本稿では、主にソ連の民族学界の成果の一端を手がかりに、ツンドラ地帯の諸民族について、かれらとトナカイとの関係に焦点をあてながら考察し、さらには、トナカイ飼育の起源について、乾燥地帯の牧畜との関連づけなどを考えてみたい。

一、トナカイの狩猟

ユーラシアにおけるトナカイの分布範囲は第一図のようになつてゐる。スカンジナビアで北緯六十度内外、極東地方で北緯五十度内外がその南限とされ、日本に近いところ

第一図 シベリアのトナカイ棲息圏



(資料Atlas Сельского Хозяйство СССР, Москва, 1960, アジアの気候, 古今書院)

では樺太までである。この範囲は、永久凍土の存在する地帯とほぼ一致し、これは、年平均気温がマイナス二度C以下の地域にあたる。植生では、タイガ北端からツンドラ地帯で、そこに生える地衣類がトナカイにとって欠くことのできない食物である。④ 人間の側からみると、ここは、一般に農耕の不可能な地方で狩猟・漁撈民のみが居住してきたところである。

野生のトナカイは夏と冬とで棲息場所を異にし、夏は北のツンドラ地帯、冬は南のタイガとツンドラとの接する地帯——森林ツンドラ——とほぼ決ったコースと範囲を大群をなして移動する。その距離は数百キロから千キロ余りにも達するが、このような移動の原因は冬の厳寒をさけての南下と、夏の虻、蚊などの害虫をさけての北上とされ、それに附随して餌となる植生との関係も考えられよう。⑤

この野生トナカイを狩猟の対象とし、それが極北の住民の生活の支えになったのはいつかという起源の問題は、飼育の起源などとあわせて後に触れたいが、ひとまず、新石器時代の中・末期という説⑥に従っておこう。原初的には、河川や海の沿岸に定着して漁撈と海獣狩猟をしていた極北

の住民がツンドラの原野をエクメネーとし得たのは、トナカイ狩猟の技術によってはじめて可能であったといわれる。

トナカイの狩猟方法^⑧には、いろいろあるが最も有効な方法は、水上で捕えることであつた。トナカイは、春と秋の大群による移動の際、コースの途中にある河川では、毎年決つた地点で渡河をする習性がある。そこで、渡河点に待伏せして、河の中で捕えるのである。最も初期の段階ではこれを浅瀬で行なつたであらうとされる。それでさえも、数日間、もし保存がきくならば、一年中の食料を確保するに足るだけの狩猟ができたと考えられている。後になると、皮張りまたは丸木の小舟が用いられるようになった。ヌガナサン、エネツなどに今日まで残っているこの方法は、渡河の途中、泳いでいるトナカイの群の中へ狩人達が舟を乗入れて槍で突き殺し、他の一団の者が下流でそれを拾い上げるのである。ヌガナサンには、春、秋の移動期以外にも、これに似た狩猟方法として、川とか湖の岸に柵をつくって出口を水上につくり、トナカイを水中に追込むとか、川や湖の畔で対岸が崖になつたところへ追いつめて捕えるといった例があり、こうした場合、猟犬が使われてい

る。

水上狩猟以外の方法には、皮を編んだ網とか罠の中に追込むものがツンドラ一帯にひろくみられ、その他落し穴、仕掛け弓の方法などがある。個人による狩猟として罠を使って誘うとか楯にかくれたり、トナカイの皮をかぶつて獲物に近づき、投縄で捕えるなどがある。ことに投縄の技術は飼育トナカイの群の中から一頭を捕える場合にも重要である。このような狩猟を行なう民族では、マヤトの例^⑩によると二・三十人の狩人とそれにとまなう女・子供がひとつのグループをなしている。

さて、こうして得た獲物はどのように処理するのであるうか。二・三例をあげると、狩場で差しかけ小屋をつくり、その中に吊しておくとか、穴に隠し皮とか石で覆いをして保存し、その附近に半地下式の住居をつくる。狩猟の止む冬には、こうして何か所かにつくっておいた貯えを次々と食べながら氷上での漁撈などをして生活する(マヤト)。また、獲物の肉・脂・魚などを秋に氷づけにしてツンドラに残して行き、春にタイガ地方から戻つたばかりの食料の乏しい時期のための備えとする(ヌガナサン)。これらは、

永く凍土の存在する寒帯なればこそ可能なのであろう。又ガナサンおよびその他に広く行なわれる別の肉の保存方法として乾燥肉にするというのがある。これは、夏から秋にかけて肉を野天干しにして、細かく切り、これに脂肪をまぜて再び乾燥させ、皮袋などに入れて貯えておくというものである。

二、トナカイ牧畜の形態について

シベリア各地におけるトナカイの飼育目的は大別して二つに分けられる。そのひとつは、群として飼育し、遊牧を行なうもので、主に人間の衣食住の源として利用する場合であり、ツンドラ地帯に一般的である。いまひとつの方は、トナカイを単独でか、あるいは、数頭で用い、その背に荷物や人を乗せるか橇を引かせる利用の場合であり、タイガ地帯に比較的多く行なわれている。これら二つの牧畜を比較的に見れば、乾燥地帯における羊と馬の役割をタイガやツンドラ地帯ではトナカイが兼ねているということができようか。

トナカイの飼育がどのようなものであるかを考えるには、

この羊型の飼育と馬型の飼育とを分けてみる必要がある。うである。そして、いづれのトナカイ飼育にせよ、はじめに述べたように、多かれ少なかれ狩猟・漁撈もともなった上でのことであることに注意する必要がある。

a、狩猟・漁撈に重点をおく遊牧

ユーラシアの最北端に居住するヌガナサンからみてゆこう。これらの生業は野生トナカイ、ガチョウ、北極ギツネなどの狩猟、それに漁撈とトナカイの飼育である。そして冬は森林北限附近に、夏はタイミル半島のツンドラへと移動して生活している。トナカイの飼育はしていても、半飢餓状態の時がしばしばあり、ことに春にはその傾向が強いという。夏には、一部の者が軽装で半島の奥までトナカイ狩に出かけ、その他のものは鳥狩や漁撈を行ない、秋になると大がかりな野生トナカイ狩が渡河点で行なわれ、そのあと氷上漁撈^④をやり、初雪とともに森林限界の地方へと南下する。しかし、一部は、冬もツンドラに止まって二・三家族でグループをなして、石、流木、芝土などで覆った半地下式住居に住み、氷上漁撈で夏の間に貯えた食料を補わないが越冬する。こうしたヌガナサンの生活では、ト

ヌガナサンの構成とトナカイ頭数

氏族 (poA) 名	家族数	人 口		飼育トナカイ数	
		総 数	一 家 族 平 均		
アヴァムスキー・ヌガナサン(遊牧圏 I ~ V)					
チュナンチェヲ	20	103	5.1	4495	
リナンチェヲ	29	139	4.8	4475	
ニノンジエ	39	175	4.5	9254	
ヌゴムジエ	14	76	5.4	4931	
ヌガムトソ	16	81	5.1	1316	
計	118	574	4.9	24471	
ヴァジエフスキー・ヌガナサン(遊牧圏 VI)					
アシヤンドウ	6	33	5.5	307	
クブチク	12	71	5.9	1904	
コカサ	15	73	4.9	672	
ラブサイ	5	24	4.8	642	
ヌゴイル	2	12	6.0	103	
ニヨルホ	1	11	11.0	170	
計	41	224	5.0	3798	
ドルガン・ヌガナサン(V ~ VI内に散在)					
オ	コ	11	69	6.3	3625
総	計	170	867	5.1	31894

(Г. О. Долгих 1951 による)

の間、他の成員は狩猟・漁撈を行なっている。そして、飼育されるトナカイの群と群の境は、自然の境界、すなわち、湖、川、山などとなっている。ところが、夏の牧地が広いのに対して、冬のそれは著るしくせまいが、タイガ内での冬の飼育方法は、夏の遊牧群を細分して、五ないし十家族ごとに決められた森林範囲内で柵を設けて飼育し、これを移動させて行く。これにしたがって、住居も一冬に数回移動することになる。なお、トナカイの冬の餌は、苔類以外に森林内の草、灌木などとなる。

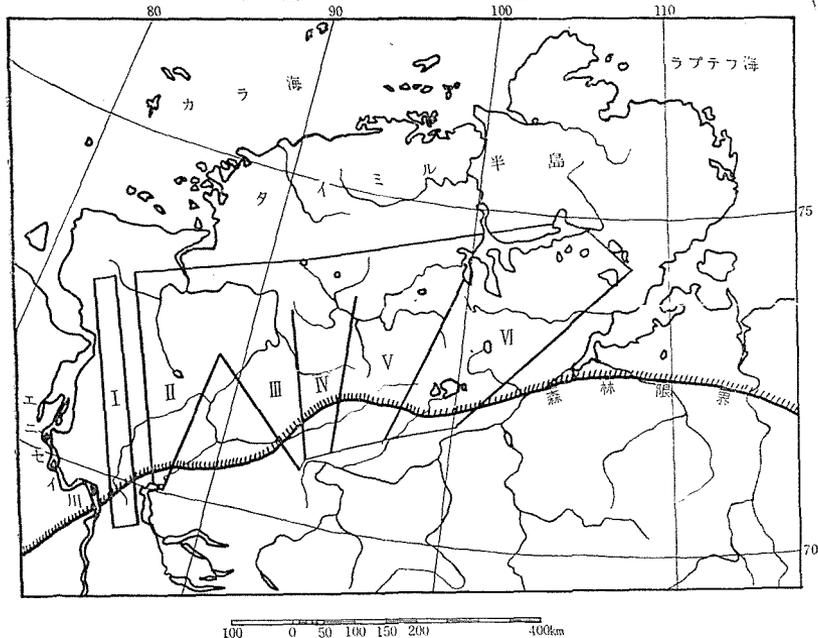
トナカイは狩猟動物として重要視され、その肉は、飼育トナカイのものより好まれるという。飼育トナカイも野生に近い性質をもち、蛇の発生する夏期など、群を保たせるために犬も使って昼夜を分たぬ監視が必要とされる。

ヌガナサンの居住範囲(遊牧圏)は第二図の如くであり、人口・飼育トナカイ頭数など右表のようになっている。

ドルガンの例であるが、ソンドラでの遊牧は、遊牧群を地域集団ごとにつくり、牧夫を順番に出して放牧させ、そ

とところで、狩猟や漁撈、ことに漁撈に重点があると、人々は湖や河川の沿岸に一定期間定住することになり、その間、トナカイの遊牧と両立しなくなる。そこで、トナカイを自然のままの放し飼いにすると、特定の牧夫に放牧を任せる例とがでてくる。まず、ケートでは、トナカイを飼うものは全体の四十パーセント程度で、それもきわめて幼稚な飼い方という。春、漁撈がはじまると主に役畜として使われるトナカイは森へ放してしまふ。同様のことは、セ

第二図 ヌガナサンの遊牧圏



(B. O. ДОЛГИХ: ПРОИСХОЖДЕНИЕ НУГНАСАНОВ, 1952 による)

リックープにもみられ、夏の間は、全く監視をせず、しばしば出産期(春)まで放置されることもある。エヴェンではキノコを食わせるために秋に自然放牧をさせ犬を使ってまた群をあつめる。こうした放牧を行なうとトナカイを集めるのに困難がともなうらしく、マンシでは、初雪が降るとトナカイ集めにかかるが、それが二カ月も要するという。このような放牧は、エヴェンキで多頭飼育をしているものにもみられ、かれらは移動の時期とか市場へつれて行く時に集める。

次に、牧夫を雇って合併放牧を行なう例をいくつかあげよう。ハント、マンシは、春から北方へ移動して、北極海沿岸で海獣狩猟と漁撈を行なうが、その間、トナカイの遊牧は、右にあげた例のほか、各家族のトナカイを合併してウラル山地に放牧させ、これには特定の牧夫が従って行く。ウラルへの放牧はトゥヴィンツも行ない、冬の住地から百キロ以上へだたる山地へ向い、夏には雪山に近づき、九月に下山しはじめる。いまひとつ、森林地帯から外へ出ないエヴェンクの例であるが、かれらは、一家族平均、役畜として二十五頭程度のトナカ

イを飼っていて、冬のタイガでの狩猟期を終えると教家族が集まって、トナカイは出産に適した高燥地に移す。そこで雌のトナカイは分けて柵内に入れ、害虫を煙いぶしをしてさけながら飼育する。この合併放牧は夏中つづき、秋・冬の狩のシーズンに入ると再びタイガ内に家族単位で四散する。

牧夫として放牧に従事するものにもいくつかの類別ができる。コリヤーク、ドルガンにみられるように家族中の青年男子がこれに当りそれが順番に出て群を守るといふ例が多いようであるが、もとより、これは飼育するトナカイの数によって異なるらしい。後述のネネツなどでは、合併して放牧されるトナカイの頭数が数千頭にもなると、そのため牧夫はトナカイの大所有者に従属する下層民となる。

b、トナカイ遊牧に重点のあるもの

これに含まれる種族はネネツ、チュクチ、コリヤークそれにユカギールなどである。かれらもまた、狩猟・漁撈と縁があり、トナカイ飼育が専業化したのは比較的新しく、ロシア人との接触以後のことであるといえる。^⑩

まず、チュクチであるが、この種族は東北アジアに住む古アジア族中、最大の人口をもつものである。^⑪ 全体のうち、

約七十パーセントがトナカイによる遊牧生活をしながらツンドラ地帯に居住し、あとの三十パーセントほどは、海岸地方に定着して海獣狩猟や漁撈をしている。

このトナカイ・チュクチと定住チュクチとは、経済上無縁ではなく、種族的にも近縁関係にあるといわれる。両者は、事情によっては互いに入れかわることもある。つまり、海辺の定住者がトナカイの群を手に入れて遊牧生活者になるとか、逆に遊牧生活をしてきたものがトナカイを手ばなして海辺に定着し、狩猟・漁撈者になるといふわけである。なおまた、両者の中間的なもので、トナカイを五十ないし百五十頭程度飼っていて、海岸近くのツンドラで遊牧をしながら海の獲物も捕えるという例もある。

チュクチのトナカイ飼育法は、犬を飼わず牧夫のみによる管理によっている。夏の虻や蚊の大発生する季節にもまた冬の吹雪、狼の襲撃などによっても群が散ってしまい、牧夫は行方不明のトナカイを捜す仕事をたえず負われ全部をつれもどすことが不可能となる場合もある。^⑫ チュクチのトナカイの馴化程度の低いこともこの原因であろう。^⑬ 役畜として使うために群の中のトナカイを投縄で捕えるとか

塩などでおびきよせるなど狩猟において用いられる方法が生きているのもその現われであろう。

トナカイ・チュクチでは、この遊牧によって生活必需品をまかなうことができるわけであるが、海獣狩猟や漁撈をしている沿岸チュクチとの間に恒常的な交易関係があり、灯・暖房用のアザランの脂とトナカイ皮の交換などを行なっている。

チュクチとよく似た生活をしているコリヤークの場合を例にその遊牧方法をうかがってみよう。まず冬には、住居の附近での放牧から次第に餌のよい場所を求めてトナカイの群は遠ざかって行く。一家の主が橇に乗って遠出しては良好な牧地をさがし、放牧地が住居から著るしく遠くなる、一家をあげて群の近くに移住する。こうした住居の移動を一冬に数回行なうことは、先のドルガンの例と同じである。

春、出産が近づくと雌のトナカイは群から分けられ、五月頃には、生まれた仔トナカイの世話・保護などの仕事に家族全員が忙殺される。

夏になると害虫をさげ、また良い苔類の生えた牧地を求

めて山地のツンドラ帯へ向う。この間の放牧の結果が、トナカイの肥え具合を大きく左右するので、牧夫には、ツンドラに対する深い知識とか経験の豊かさが要求される。コリヤークでも犬を飼わず、牧夫の速い足、鋭い勘、巧みな投縄の技術などが群を保護するのに欠くことができない。一方、夏の住居は一般に魚類の豊富な河川の沿岸におかれ漁撈も重要な仕事である。

九月から十月の初め、トナカイの群は山地を下って住居地に集まってくる。この時、トナカイを迎える儀式がくりひろげられる^②。そのあと初雪をみると森林の冬の牧地へと移動するのである。

このようなトナカイ遊牧で飼養されるトナカイの数は、二十世紀のはじめのユカギールの例によると一万頭に達する群を二・三持つというような大所有者の存在が知られる。トナカイ遊牧における所有形態をネネツの場合について一瞥しておく。

十九世紀末、ネネツの家族の八二・八パーセントが全トナカイの二四・六パーセントをもち、これは頭数にするとか々数頭ないし、百頭前後であったのに対し、一七・二パ

ーセントのものが全頭数の七五・四パーセント、百頭以上数千頭の群をもっていた。遊牧地となるツンドラは、一応は共有地とされていても、事実上は大群を所有する有力者の支配権が及んでおり、数十キロから百キロにわたる交通のルートがはりめぐらされて、放牧に必要な物資の補給とか牧夫への監督などのために用いられた。このような有力な大所有者の下にあって働く牧夫への支配形態には大略次のようなものが認められた。

放牧のための牧夫の雇傭。少数のトナカイをもっている者とか全くもたない者が傭われる。自分の所有の少数のトナカイを飼養するものも、牧地の確保、その他の面で大所有者に事実上、従属して生活する。

秋のトナカイの屠殺の時期に肉とか皮を借りる。そして、翌年の秋または冬に狩猟で得た毛皮や魚、海獣などの獲物によって返済する。

未訓練の役畜用のトナカイを借り受け、これを訓練して返す。また、役畜を借りて使用料を払うこともある。

しかし、トナカイ飼育における支配関係あるいは搾取関係は、トナカイ牧畜そのものの内では行なわれず、有力者

に従属するものを使って、野生の動物の毛皮とか漁撈による魚などを得るための関係というのが比較的多かったらしい。すなわち、トナカイの大群を所有するものでも狩猟・漁撈とは絶縁しておらず、そうした獲物をコンスタントに得ることが必要であり、かつ有利であったと想像される。

トナカイ飼育が專業化され、大群を所有するものが現われたのは、シベリア原住民のロシア人との接触以後（十七世紀ないし十九世紀以後）である。ロシア人がウラル山脈を越えてシベリアの奥深く侵入したのは、高価な商品となる毛皮を求めたのが最初の動機のひとつとされ、シベリア原住民の間では、従来あまり狩猟の対象とはされていなかった北極狐（食用にならない）などの狩が盛んになったのとトナカイを狩猟・漁撈をともなった自給生活に必要な頭数をはるかに上まわるほど多数飼養するようになったのとは、ともにロシア商業資本の侵透によって引起された変化であるろう。

ロシア人到来前のシベリア原住民が自給的狩猟・漁撈・トナカイ飼育の生活をしてきたことは、これらの食生活の上でも、他地域とは違った特色として現われている。

農耕の存在しないツンドラ地帯の住民には元来、穀物を食べる習慣はなかったと想像される。狩猟・漁撈の獲物が主要な食料源であり、その他にツンドラないしは森林ツンドラに自生する植物の根、野イチゴなどを食べている。植物性の繊維質としては、屠殺したトナカイの胃袋の内容物である青いカニ状になった苔類(Phyllophora)に動物の血、脂肪などを加えたものがチュクチの常食のうちに加えられる。²⁹⁾

遊牧民には、その飼養する家畜の搾乳がともなうと一般にいわれるが、この点からトナカイ飼育民をみると、ツングース系のエヴェンク、トルコ系のトゥヴィンツに見られるが、この両種族ともモンゴリア・中央アジアに接近して居住することは、トナカイ牧畜の系譜を考える上のひとつの材料となり得よう。

ツンドラ地帯の外の世界との恒常的な交渉の存在の可能性を暗示するものにこのほか、茶の飲用があげられる。茶を飲む習慣は、ネネツ、セリクープ、エヴェンク、チュクチなどの種族にかなりひろくみられる。もしも、茶を飲むことが古くからあったものとするとな茶ははるばる中国から

モンゴリア、中央アジアの遊牧民を媒介にしてシベリアのツンドラ地帯にまで運ばれたことだろうか。茶は穀物にくらべれば運搬も容易であろう。もつとも、セリクープの例では、ネズの煮出汁(настой морскихелюшка)を飲むというところを見ると、茶を飲むようになったのは比較的新しいことかもしれない。

以上によって、トナカイの飼育ないしは遊牧というものは、乾燥地帯に行なわれる羊、などの牧畜とは、かなり相違したものであることが知れる。次には、トナカイ飼育の目的のいま一方の面、馬の役割に相応する利用面についてみよう。

c、役畜トナカイの系統

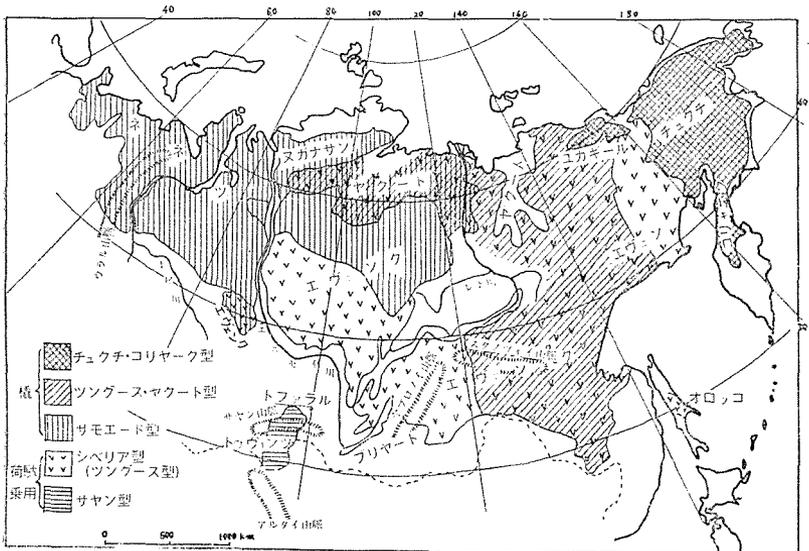
シベリアにおけるこの面でのトナカイ飼育に関する形跡としては、サヤン山脈の北麓、ミヌシンスク附近のトゥーブ川沿岸の遺跡にある。コルツラソフ等の発掘した紀元一世紀頃の遺物の中に馬具に似たものをつけた鹿の絵が認められるのがこの種のものとしては最古のものといわれる。

この附近では農牧業が行なわれ、中国文化の影響も及んでいたところである。³⁰⁾考古学上、シベリアにおけるトナカイ

飼育のあとは、石器時代の遺跡からは発見されておらず、極北アジア一帯の民族が徒歩からトナカイによる運搬に変わったのは比較的新しいことが歴史史料、民族誌資料などから推察されるのである。

すなわち、民族誌資料から判断すると、トナカイの飼育はかなり新しいことで、おそらく馬の飼養の影響の下に発生したものらしいという証明が成立つのである。そのわけは、トナカイの役畜としての利用に関する諸々の術語、鞍、端綱その他の家畜用具の構造とか型などの分析結果があげられている。それらを総合し、過去と現在との民族分布図や、各々の家畜用具の型の分布図を作製して比較検討すると、シベリアのトナカイ飼養は、多分、東西二つの中心地方から分散・伝播したものであらうと考えられることになる。その西の中心はアルタイ・サヤン山地であり、東の中心はザバイカリエのヤプロノイ山地から沿アムールにかけての地方であり、ほぼエニセイ川を境にしてそれぞれ北方に伝播し分布したものと推定される。それぞれのほじまりは荷駄用としてのトナカイ利用であったが、これが分布範囲をひろげるにつれて、各地で独自の発展分化をとげた。

第三図 役畜トナカイの分布



(Историко-Этнографический Атлас Сибири, Москва-Ленинград, 1961 による)

大まかには、タイガ地帯では駄獣、ツンドラ地帯では挽獣となる傾向があった。ただし、この両様の使い方は、明確に分界されてはおらず、東シベリアではかなりの範囲で重複していることは第三図に見る如くである。

ところで、この二つの中心からトナカイの利用の技術を伝え、ひろめたのは何者であろうかという問題に対して、西ではアルタイ・サヤンから北へ移動したサモエードが有力であり、東ではツングース系の種族の移動が有力な手かりを与えている。また、タイガ地帯から伝えられた駄獣としてのトナカイの利用法がツンドラにおける犬橇の技術に影響されて、トナカイの背による運搬にかわってトナカイにも橇を引かせることによって挽獣としてのトナカイの利用法が成立したものと推定される。そこで、西ではネネツのトナカイ橇はサヤンから来たトナカイ飼育に先住民の犬橇が結びついたものであり、東のチュクチ、コリヤークのトナカイ橇は、ツングース系種族のもたらしたトナカイ飼育法と現地の犬橇に起源があるということになるのである。これらの関係について「シベリア歴史・民族誌図解」の説明するところを部分的に要約してみる。

今日のサモエード語族はトナカイ飼養以前の北西シベリアの住民とサヤン山脈から北方へ移動し、この地方へトナカイ飼養をもたらしたサモエードとの混血によって成った。これに関連して、西シベリアの犬橇の年代の問題が出てくるが、あらゆる証拠からして、この地方では挽獣としての犬の飼養がトナカイの飼養よりも古いことが知られる。

もっとも初期の文献——ロシア年代記やアラビア、西欧のもの——によるとウラル附近には犬橇が存在しており、トナカイによる輸送は史料上、より後代に現われてくる。すなわち、十一世紀から十三世紀には北ウラルとオビ川沿岸は犬橇の分布地域であった。十五世紀には、犬橇とトナカイ橇とが並存しており、十八世紀から十九世紀の記録では、犬による輸送は姿を消している。

明らかに、荷駄・乗用トナカイをともなったサモエード語族がサヤンから北へ移住する過程で犬による運送法を知っていた先住民と出会い、これらの一部が先住民から挽獣としての犬の利用技術を借用してこれをトナカイに応用したのである。

一方、サモエードにおける荷駄・乗用トナカイの痕跡はサヤンから北のルートに沿ってたどることが可能で、このルート上に今日居住するトファラル、トゥヴィンツ、カマジンツなどの諸族によって確かめ得る。森林ネネツ（サモエードの一派）が過去において荷駄・乗用トナカイとトナカイ橇との両方をもっていたこともゲオルクの記述するところ（一七七七年）によって確認できる。

橇の形をみると、西シベリアの過去の犬橇は滑り木——スキーの部分——の上につく小柱（滑り木の上に立てる支柱。そのさらに上に乗用あるいは積荷用の台がつく。）が垂直のタイプに属している。ところが、西シベリアのサモエードのトナカイ橇の滑り木の柱は傾斜した型である。これは、おそらく、サモエードがツンドラ地帯に居住するようになってから改良されたものであろう。サモエードのうちのネネツ等がトナカイを多数飼い、年間を通じて長距離の季節的な遊牧を行なうようになる。ツンドラにある多くの小丘、沼沢、河川などを通過するために腰高の頑丈な橇が必要であった。それは、高い滑り木の柱を傾斜させて据えつけ、滑り木の間隔をひらけることで達成できた。

橇に家畜をつなぐ方法を検討すると、やはりトナカイ橇は犬橇にその起源のあることがわかる。つまり、犬橇のひき綱は犬の後足の前の部分——腰部——に結びつけられ、その革紐は後足の股の間を通していた。犬が体の後半部で橇を引くというこの連轂法は西シベリアに特徴的なものであるが、サモエードのトナカイ橇の連轂法は明らかにこの犬橇の方法を受けついでるのである。

チュクチ、コリヤークにおいては、トナカイ飼養をツングースから借用したとの説が肯定できる。それは、チュクチ、コリヤークとツングースにおけるトナカイ使用法に共通したところ、例えばトナカイの右側に手綱を通し右側から乗るなど細部まで相類似している。また用語上もチュクチ、コリヤーク語のトナカイを意味することは *коруны*（チュクチ）、*коруна*（コリヤーク）でこれらの語根（*кор* // *kor*）は、ツングースの家畜トナカイを意味する *орон*（*or* / *kor*）に近いなどが指摘される。また一方、チュクチ、コリヤークも古くから用いていた犬橇をトナカイに応用した。このことはやはり滑り木と上の台の間の支柱の型が証拠のひとつとなっている。チュコト地方やカムチャツカの

古い犬橇のそれは、弓形の支柱であり、トナカイ橇もその型を引継いでいる。

次に荷駄・乗用のトナカイ飼養についてみると、サヤン型の多くの要素が馬による運搬の方法とおどろくほどよく似ている。それは、鞍の構造、乗り方などに共通点が見出され、子供用の鞍の取付け方はカザフのそれに類似のものを見出せるのである。用語の上では、トルコ語系の名称がトナカイの鞍その他の用具につけられている。

他方、ツングースには、輓獣としてのトナカイも駄獣としてのそれも分布している。これには、夏は荷駄用、冬は橇用といった使いわけもある。ところが、ツングースの橇はサモエードおよびチュクチ、コリヤークから借用したらしい形跡があり、橇による運搬法は荷駄・乗用より、ずっと後に現われたものである。また、ツングースの荷駄・乗用トナカイの分布も一様でなく、様々な用法、形態があることから判断して、元来、ツングースには荷駄用のトナカイだけがあったらしいことが推定される。そして、乗用トナカイについては、鞍などの用具の名称にモンゴル語からの借用が認められるのである。その他の証拠も考え合せて

ツングースの乗用トナカイは、モンゴル系の民族の馬の利用法の影響によって発生したということを指摘できる。

ヤクートの橇の起源は、はっきりしない。構造上、東シベリアの犬橇にも似ているが、ツングース系の狩猟用の橇にも類似点がある。そしてさらに、ヤナ・レナ下流域のヤクートの伝説には、非ツングース系の住民の使用する犬橇に及言した点がある点が目される。

アルダノ・アムール地方のトナカイ橇は、ここ独自の原型としての犬橇があったと考えられる。その他に樺太のオロツコの橇は、大体、ツングース系として説明できる。

以上がシベリアの役畜としてのトナカイおよびその使用する用具類の系統論の概略であるが、要するに役畜トナカイは、中央アジアあるいはモンゴリアの役畜——馬の利用技術の影響の下に発生し、それが各地域の自然条件、あるいは住民の民族的伝統的技術（文化）によってそれぞれ独自の発展をとげたということになろう。その発展上のひとつの大きな出来事としてツンドラ地帯にすでに存在していた犬橇によってトナカイ橇を考え出したことを位置づけら

れるのである。

三、トナカイ牧畜の成立過程について

前節までにおいて、トナカイ飼育の若干の具体例を考察することによってツンドラ・タイガという自然環境に棲息するトナカイという動物による牧畜が、ひろく乾燥地帯に行なわれている牧畜と何らかの共通性があるか否かを見てきた。飼育あるいは利用形態上、よく似た点があり、また乾燥地帯の牧畜と農耕の間にみられる諸関係に形の上では、はなはだよく似たもののいくつかがトナカイ飼育と狩猟、漁撈との間の関係におきかえてみるとまゝあてはまるといえそうである。合併放牧あるいは委託放牧に家畜を出しておいて、乾燥地帯では農耕を行ない、寒帯では漁撈を行なうなどは、そのよい例であろう^⑤。

しかし、そうした現象面での類似あるいは相違の比較よりもさらに重要なことは、トナカイ牧畜の形態の背後にあるもの、いいかえると、いかにして極北という地域ではこのような牧畜が成り立ったのかという経済的文化的な実体の把握であろう。

そのためには、極北の文化が歴史的にいかにして形成され発展して来たのか、という問題に触れなければならない。だが、これについては、欧米の幾多の研究成果の蓄積があり、今にわかには概観することはできない。そこでこれも前節までの線にそって、ソ連におけるこの問題についての研究のあらましを基礎にして論を進めることにする。

a、シベリアの基層文化

シベリアにおいて基層となった文化の形成に到るまで、からみて行くと、まず、旧石器文化が氷河期の寒冷な自然条件の下で現在よりずっと南の方で形成され、それが氷河の後退とともにほぼそのままの文化体系をもって北上し、シベリアの旧石器狩猟文化をなした^⑥。時代はずっと下って、紀元前四千ないし三千年頃、ザウラリエ地方に湖岸狩猟漁撈民の初期新石器文化が発展したが、ここの古代ウラル族の初期の土器には中央アジアの新石器土器と同じものがあり両者の接触があった証拠とされている^⑦。この段階の文化が氷上狩猟文化と名づけられたものに当り、湖岸や河川沿いに半定住的な生活をしながら狩猟・漁撈、とくに漁撈に従っていたと想像される^⑧。これを基礎に定住漁撈民と海獣

狩猟民の文化がシベリア各地の河川や北極海沿岸、ベーリング海附近にひろまった。このような漁撈・海獣狩猟民には家畜として犬の飼育をともなっていた。ただし、犬の飼育化の起源には、まだ定説はないようであるが、海獣狩猟や漁撈では犬の飼料でまかなうに足るだけの獲物を確保できるといふ点が肝要であろう。

一方、紀元前四千年の末までにスキューと橇が発明され、沿岸に定着した新石器時代のシベリアの住民にひとつの転機をもたらして、川と川との中間地帯のツンドラへも人間の進出を可能とし、ひいてはタイガ帯の中での狩猟生活も起ったといわれる。これが先に上げた新石器中・末期の野生トナカイ狩猟の発生にかかわるのである。この橇は、滑走部が一本のもので、これを動物の皮で覆うとカヌーとなり、氷海でも用いられるようになったと解釈されそれはさらに、エスキモーの皮カヌーにも結びつく可能性があると考えられる。

ところで新大陸のエスキモーの文化とシベリア諸民族の文化とは同一起源のものか、あるいは、少くとも共通の要素をもっているか否かについては、かなり議論の別れると

ころであるが、³⁴ アラスカとシベリアの古い文化要素を考古学上および民族学上、探求してみると環北極文化ともいふべき、共通の経済・文化型の存在をやはり否定はできないようである。

それは、例えばユカギール、チュクチにうかがわれるトナカイ狩猟・氷獣の文化要素がエスキモーのそれに先の皮カヌーのみでなく、家屋、衣服などについても共通したものがあ、言語学上、古代ウラル語とエスキモー語との間の関連の可能性を唱える説もある。

こうした環北極文化がシベリアの基層文化であるとするのであるが、シベリアにおけるその担い手は、古アジア族と総称される諸族であり、かれらはロシア人と接触するまで基本的には新石器の段階の狩猟・漁撈民であった。古アジア族は大きく二つに分けられる。第一は、オホーツク海とベーリング海沿岸における漁撈と海獣狩猟の北東古アジア族でこの内には、海獣狩猟に重きをおく北方沿岸のチュクチ、漁撈が主の南のイテリメン、両者の中間に位する沿岸コリヤークなどがある。第二は、野生トナカイの狩猟と一部、河川での漁撈を行なう型の種族で東はアナジル川流

域から西はタズ川流域にかけて広く居住したユカギールがこれに当る。^⑤

しかし、一応こうした類別はなされても、トナカイ狩猟はいづれにおいても重要な生業であった。漁撈では食料の獲得はできても、衣服、住居の材料を得るには不十分であった。ところが、こうした純粹な形で狩猟・漁撈民は、十七世紀以後にロシア人がシベリア北方に到った時には、原住民の間の伝承として残るのみで、実在はしていなかった。そうした伝説の類に伝えられている経済・文化段階に民族誌上対応するものは、ユーラシアの外に求めねばならず、おそらく、ビルケット・スミスが記述したカリブー・エスキモーがそれに該当するであろうといわれるのである。

b、トナカイ飼育の波及

それでは、十七世紀にロシア人がシベリア北部で実際に出会った原住民の文化はどのようなものであったのか、シベリア諸民族の文化を新大陸のエスキモーの文化との決定的な差異は何か、というところに現われるのが実は、トナカイ飼育の問題なのである。

極北（ツンドラ地帯）の文化に本質的な変革をもたらし

たのは、新しい経済の導入、すなわち、トナカイ牧畜であったろうといわれ、時代は十一世紀末頃からと推定する説がある。^⑥そして、このトナカイ牧畜は、極北地方といってもユーラシアだけに普及したのである。

トナカイ飼育の出現は、狩猟・漁撈・トナカイ飼育民の形成を導き、これはシベリアのタイガからツンドラ地帯にかけてひろく広まった。トナカイ飼育はこうして、極北ユーラシアの狩猟・漁撈民の生活を大きく変えたが、これはしかし、単なるトナカイ飼育の技術が発生したということによる結果ではない。その技術を生み出し、支える経済・文化的背景が当然、想定されるはずである。いうなれば、狩猟民の経済・文化の内部で、トナカイを飼育する技術が突如として発生したという可能性は薄く、やはりこれはよそから伝わって来たものと考えられるのである。同じ極北の経済・文化型に属した新大陸に、トナカイ飼育が発生しなかったことは、その重要な証拠に数えることができるであろう。新石器文化同様、この新しい経済・文化もやはり南から、比較的新しく波及して来たものと考えられ、具体的には民族移動をもっておおよそのところは説明できる。

この事情について、ユカギールのツングース、サモエードへの同化過程をタイムル半島においてみるとほぼ次のようになる。^⑧

現在のサモエード系種族であるヌガナサンの基層は、古アジア族、ユカギールであったことは、考古学、民族誌学的にかなりはっきりしている。また、おそらく、この附近がユカギールの分布の西の端であったと思われる。このユカギールの層に半島の東部へは南からトナカイ飼育をともなったツングース、それより遅れて、西部へはサモエードが、それぞれ野生トナカイを追って侵入して来た。この様子は多くの伝説などによってうかがわれる。ユカギールのツングース化がサモエード化に先立って起ったことは、例えば、地名研究によつてはつきりする。すなわち、タイムル半島のタイムルなる地名は、ヌガナサンの言語では解釈できない。この半島は野生トナカイや魚類が多く獲れる重要な狩場なのであるが、ツングース語で *тайпа* は「豊富な」「価値ある」といった意味をもち、ヌガナサンがタイムル川を *Taimyran* と呼ぶところの *ano*, *anyt* はやはりツングース語で湖または川の意なのである。このようにヌガ

ナサンはすでにツングース語を話さぬのに地名には、それが多く残存し、半島の大きな川の名はみなツングース語であるという。ただし、第二図のⅣ、Ⅴでは、こうしたことが全面的にいえるが、Ⅲでは部分的であり、Ⅰ、Ⅱでは、完全にサモエード語系の地名となっている。

サモエードは西からタイムル半島に侵入し、これを夏の狩猟・遊牧場としたが、ここで先来のツングースと出会い、ついには、これを同化して、半島一帯の種族がサモエードの経済・物質文化、生活様式などを強く帯びるに到り、言語上もサモエード語系となったと解釈されるのである。

以上を要約すると、ヌガナサンの形成は、ウラル並びにアルタイ系語族の中央シベリア北端への移動の総決算なのである。一般的な傾向としてシベリアには、エニセイ川より西ではサモエード、東ではツングースが侵入したのであるが、タイムル半島附近ではこの両者が古アジア族（ユカギール）を同化し、最終的にはサモエードがツングースをも併したことになる。そして、ツングース、サモエードにより新しく狩猟・漁撈にトナカイ飼育が附加されたと解されることになる。

サモエード、ツングースは、役畜としてのトナカイ飼育をともしなう狩猟生活をしながらそれぞれサヤン、ザバイカリエから北方へひろまったという考え方は先に述べた通りであるが、ソ連の民族学界では、これに群としての遊牧トナカイの起源も結びつけて考える説が強いようである。^⑧

これに似た考え方は、戦後のドイツのフランクフルト学派の中にも見出せる。

——アジア大陸の北部では、タイガの南の端まで押しだしてきた内陸アジアの騎馬遊牧民と北方の民族との文化接触があった。乗り、輓かせ、荷を負わせるための動物としてトナカイを用いたのは、南方の手本を見ならつてのことであり、馬を輸送用に用いたことに刺激されたのだということとは確かだと考えてよい。トナカイをいつ手なづけ、ついで飼いはじめたものか、まだ正確にはわからないが、しかし、ひとつの可能性として、トナカイを輸送に用いるような発達した形のトナカイ遊牧文化ばかりでなく、この群居動物の家畜化そのものさえも、北アジアの狩猟民が中央アジアの騎馬遊牧民と触れあった結果だということができよう。^⑨

トナカイの家畜化の過程自体を明らかにし得るものは何かを考える場合、開放的な場所群居し、遊牧する野生動物群に狩猟民が恒常的なつなかりをもつに到つたという動物生態学の立場からの見解^⑩のうちには、親から仔を引離して飼い、授乳のために親を誘い寄せることとか、去勢の技術の重要性なども含まれるようであるが、それらの方法による馴化の実証のためにそれらを指す用語の言語学上の分析によるその起源を探ること——いづれの民族の言語に属するのか——が手がかかりになりうるとも考えられる。こうした野生動物の馴化についての考え方は、しかしながら、いわば仮定の上に立つ理論であり、羊、馬などの馴化についても、実証されているわけではない。ただ、羊などにくらべると非常に新しいと考えられるトナカイの家畜化において、あるいは、このような仮定が実証し得る可能性もあり得よう。

シベリアにおけるトナカイの家畜化の独立発生説はさておき、ツングースに関してそのトナカイ飼育の起源の年代だけでも決して簡単には解明できない。先に十一世紀頃という説を上げておいたが、さらに、古くさかのぼる可能性

がある。白鳥庫吉は次のようにいつている。

——通古斯民族は支那の歴史に於て、周末に肅慎の名によつて現われ、次いで漢・魏の時代には挹婁と呼ばれている。肅慎は通古斯語の一方言で、馴鹿ぞかのことで、Sokse(n)とも Sökzo(n)とも音ぜられ肅慎(sukse(n))は、多分この

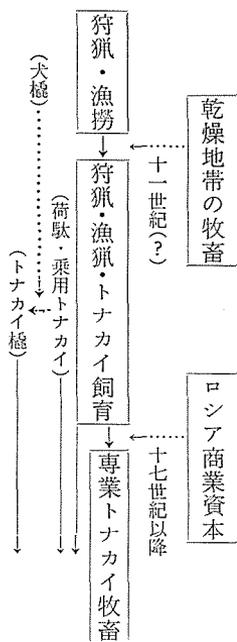
音訳であろう。……七世紀には、彼の地大陸に於てはこの民族はすでに韃鞫と称している。挹婁も同様通古斯語の或方言で、馴鹿のことを指して Oro とも Iru ともいう。挹婁(Ip-in)はけだしその対音であろう。この三称は、通古斯人の Orokk, Oroci の名称の出ずるところで支那の史書に「使鹿部」と見えるもので、その土人が馴鹿を飼育し使役しているところから出た名称に相違ない^⑩。

このツングースもトナカイの棲息南限より南に居住するもの——南方ツングースとよばれ、清朝を興した女真族がこれに当る——になるとトナカイ飼育を捨て、馬を飼ひ、農耕を行なつていたことが明らかである。また、狩猟民であつてもトナカイの分布圏を越えたものは、やはり馬飼育にたよつてゐることは、満州のオロチョン——オロチョンとは、右の通りツングース語で「オロン(トナカイ)を飼

う人」の意といわれる——について観察され、馬はモンゴル族からとり入れたものらしいと考えられている。^⑪

これを逆の方向についても考えることが許されるならば、タイガ帯の南の民族が北に移動した場合、タイガからツンドラへと馬飼育をともなつて入つて行くことは不可能であり、——事実、現在のシベリアの民族分布でモンゴル族がバイカル湖南岸附近より北へは分布してゐないのは、これがひとつの原因であつた——かわつてトナカイ飼育を採用することによつてタイガからさらにはツンドラ帯にまで居住圏をひろげることができたと想定できよう。^⑫過去、何回かくり返されたシベリアへの民族の移動現象は、中央アジア・モンゴリアにおける民族の興亡と相応ずるとされる^⑬が、それらの移動の際に、トナカイの棲息圏に入ると羊、馬の牧畜プラス農耕の生活から、トナカイ牧畜プラス狩猟・漁猟の生活に變つたと考えられる。この場合、南から伝わつたものとして、牧畜だけでなく金属器も見逃せない。古アジア族の狩猟・漁撈の新石器文化は、ツングース、サモエードのもたらした牧畜と金属器の文化によつて大きく變わりはしたが完全に抹殺されたわけではないのであつた。^⑭

以上によって、次のような想定図式が描けることになる。
シベリアに牧畜の成立過程



おわりに

本稿では、牧畜の起源についての西欧の学者の見解とか、日本の動物生態学の立場からの見解など的一端を参照しながらシベリアにおけるトナカイ牧畜の特質をソヴェトの文献資料を中心にして追求しようとした。

ソヴェトにおけるシベリアの歴史・文化あるいはひろく民族誌の研究は非常に盛んであって、すぐれた成果が数多く発表されている。しかし、当然のことながらそのよって立つセオリーはマルクス主義の立場からみた経済・文化の発展段階がどうかということにある。その点、欧米あるい

は日本の学界の一般の立場とかなりくい違っており、我われの考える特定の問題について、ソヴェトの研究ではどうなっているかといった筋の立て方では、さほど容易にその解答は得られない場合が多い。

このような理由から、トナカイ牧畜の問題も、観点をかえて、さらに考えてみる必要があるように思われる。

本稿の一部は先に人文地理学会第六七回例会で発表した。また、本稿を草するに当ってソヴェト文献の紹介並びに閲覧のための便宜を賜わった船越昭生・小野菊雄の両氏に感謝の意を表す。

① АН СССР: НАРОДЫ МИРА этнографические очерки
НАРОДЫ СИБИРИ Москва-Ленинград 1956 стр. 13.

② 今西錦司『遊牧論そのほか』秋田屋 昭三三 一一〇—一一頁。

③ 「トナカイ」というのは、アイヌ語であるが(『広辞苑』)、日本人によるこの動物についての確な記述が江戸時代になされている。

『北極開略』巻之十 物産「状鹿に似て大きき馬のごとく角扁く滑にして鹿角の如く磨練なし。毛色も鹿の冬毛のごとくまた白斑等の数種あり。もともともよく人に馴る。家々に養いおきて車橇等をひかしむ。皮は裘に造るにはなほだ暖なりとぞ。按るに此物カラフト地方にも産するよし。夷言にツナカイといふ。」

これはヨレンの説明である。ヨレン (Orren) というロシア語は、ツングース系から入ったものであろうか(後述)。

④ 「この地衣類はあたかも毛氈の如く地面を覆っている。この地衣類は雪の下でもよく残っているので、馴鹿は四季を通じて食物を容易に

見出すことが出来る。この外、馴鹿は草や喬木、樺木の若枝を食用とするが、これらは十分には得られない。……地衣類なしに生きて行く」と、短期間の後には瘠せて虚弱となる。」(シロコゴロフ『北方ツングースの社会構成』岩波 昭一七 五三頁)。

⑮ この虻、蚊の発生のすさまじさについては、いろいろな記述があるが、そのひとつに人間も日中は天幕から鼻先も出せず、天幕の中で煙をいぶしてすこし、外出する場合は頭巾をかぶる、といった状態を記している。(Armstrong: Russian Settlement in the North. Cambridge Univ. Press 1965 pp. 98-99)

⑯ シムチュニコ「北方ユーラシアにおける野生トナカイ狩猟民文化の主要特徴」『北アジア民族学論集』第二集 金沢 一九六六 八三頁。
⑰ ドルギフ「極北地方の民族学及び人類学の諸問題」(上掲論集六一頁)。

⑱ 以下、主にシムチュニコ上掲論文および B. O. ЮЛИХ: Происхождение Нранасанов (Сибирский Этнографический Сборник I АН СССР, Москва-Ленинград 1952. стр. 5-87) 並びに НАР ОЛЫСЫБИРИ 上掲による。

⑲ マドレーヌ期のラスコーの洞穴壁画がトナカイの渡河とその狩猟を描いたものとするのにこれに当るのであろう。

⑳ 棒の先に鳥の羽をつけたオドンを多数地面に立て並べたもの。

㉑ この種族は現存しない。タイミル川流域でツングース化されたユカギールであって、後にさらにサモエードにより同化された(後述)。
㉒ 荷駄・乗用としてトナカイの背には、大体、人間の大人一人程度、楯を引かせると百ないし二百キロ程度を運べる(НАРОДЫ СИБИРИ стр. 711.)。

㉓ ЮЛИХ: Там же, НАРОДЫ СИБИРИ стр. 649-652.

㉔ 氷上で氷に穴をあけて漁を行なうもの。

⑮ ただし、これで見るとわかる通り、トナカイ頭数かなり多い。所有関係を見ると、約十パーセントのものが全トナカイの六十パーセントを所有している(ЮЛИХ: стр. 15)。一九二一—二七年の調査であってロシア人と接触後の歴史がかなり長く階層分化が進んでいて、ロシア人到来前の状態は、これではわからない。なお第二図のような遊牧圏内では、二ないし三、まれに四ないし五家族が、グループとなって移動する。その際二—三家族で一個の天幕(チュム)に住んでいる(ЮЛИХ, стр. 17)。

⑯ НАРОДЫ СИБИРИ стр. 744.

⑰ 以下、НАРОДЫ СИБИРИ 所載の各該当民族誌による。

⑱ トナカイ飼育民の中には、夏はツンドラ、冬はタイガという一般の遊牧形態をとらず、通年、森林地帯で生活する種族もある。この場合、夏に害虫からトナカイを保護するために煙いぶし(дымокур)とか、特別の小屋(сарай)をつくるなどしている。これらの方法はサモエードが中央シベリアのタイガ地帯に居住した頃(参参)から行なわれ種族に伝えられた。(АН СССР, Институт Научной Информации Реферативный Журнал Географии Москва 1963, No. 4, E. География СССР 4E1-4E151, 4E107 Система оленеводства лесных эндов и ее происхождение. Ваисюбен, В. И. "Краткие сообщ. Ин-т этногр. АН СССР," 1962, 37, стр. 67-)

⑲ 本稿で「家族」と記したのは、「ロシア語文献」は「хозяйство」である。本来、「経済」「生産単位」の意であって必ずしも「家族」とはいえないが、部族とか氏族などの構成、発展等の問題に触れる余裕がないため、便宜上こうしておいた。部族・氏族などについては G. B. БАХРУШИН の論文参参照 (Самоеды в XVII в. Научные Труды III. АН СССР Москва 1965. стр. 5-12)
⑳ НАРОДЫ СИБИРИ 所載の各民族誌による。

② И. С. Вудкин: *Очерки Истории и Этнографии Чукчей* (АН СССР Москва-Ленинград 1965, стр. 15-22)

③ 一九二六—二七年の調査より二一、三六四人(ハロウズシビリ 897)。ただし、チュクチの人口はロシア人と接触以後、かなり増大してゐる。同じ古ノジナ族でもユカキールが減少の一途をたどつたのと著者との対照を示す。(И. С. Гурвич: *Этностатистика Севера-Востока Сибири*, АН СССР Москва 1966 附図*)

④ W. Bogoras: *The Chukchi of Northeastern Asia* (Selected Papers from the American Anthropologist 1888-1920, Row, Peterson & Co. 1960 p. 485)

⑤ И. С. Гурвич: *Корякские Промысловые Праздники* АН СССР: *Сибирский Этнографический Сборник IV* Москва 1962, стр. 248)

⑥ 植物の根を粉にして(べんぷん質のものか)肉や脂をまぜて一種のハンのようなものを作り、特別の場合の「チネキョウ」などもある。以下にすれち、**ハロウズシビリ** 897-911.

⑦ Там же стр. 77-78. および江上波夫「トナシナ古代北方文化」全圖書房 昭二六、二八八頁。

⑧ АН СССР: *ИСТОРИКО-ЭТНОГРАФИЧЕСКИЙ АТЛАС СИБИРИ* Москва-Ленинград 1961 стр. 24-26.

⑨ たとえばトナマル語の **таргыл** (馬) トナカイの腹帯) はトルコ語の **тарг** (引く) など。

⑩ 「鞍」の **элемин** (ハケンタ) ‘**эглүн** (ハケン語) はモンゴル語の **элэгэч-эдел** など例。

⑪ 農耕と羊牧との間のこの種の例として中国の新疆の場合などがあげられる。(拙稿「中国西北部の牧畜——遊牧から農牧結合へ——」『人文地理』一七(三三))

⑫ トルギン 上掲論集 五八頁。

⑬ Чарлестон 上掲論集 七四頁。

⑭ ニーラシマ、アメリカの北部には、共通した Ice fishing の文化が基層をなし、これから北極海での狩猟とスキューによるタイガの狩猟が分化した、というのは、Birket-Smith がはじめに唱えた説らしい。ソウェトの学者は、本文の以下にあげたように大体これに近い考え方のようであるが、Birket-Smith のいう、定住漁撈民であつて、狩猟はしなかつたところなどは、考古学、民族学などの上から肯定できないところである。(АН СССР: *ОЧЕРКИ ОБЩЕЙ ЭТНОГРАФИИ Анаглская Часть СССР*, Москва 1960, стр. 299-300)

⑮ 以下、本文の基層文化の論旨は、上掲トルギン、およびチャルネンキョフ論文によつた。

⑯ アメリカの学界では、かなりこの点、懐疑的なようである。ただし、それでも可能性はないわけでもないという傾向らしく、この方面の研究の必要も強調されている(チェンスター・S・チャード「北米人類学者による戦後の極北研究」『民族学研究』二九卷三号)。

⑰ 一方ソ連の方では、エスキモートの人種的、文化的関連をシベリア族語の中に求めようとする傾向がかなり強いように思われる。たとえば **СИБИРСКИЙ ЭТНОГРАФИЧЕСКИЙ СБОРНИК** (シベリア民族誌学選集)のシリーズにこれに關した論文がいくつも見られる。

⑱ シンドラのような開かれた場所では、獲物を追つて同一文化をもつた人間が急速に東西にひろがり、類似した文化要素がシベリアのみか新大陸の環北極圏にもひろまつた。チャルネンキョフ(論集六四頁)。
⑲ В. О. ДЮЛИХ: Там же, стр. 9.

⑳ シムチェンキョフ上掲論文(論集 八三頁) И. С. Гурвич: Там же стр. 30.

㉑ В. О. ДЮЛИХ Там же стр. 81-87.

- 38 チュクチ・コリヤークのトナカイ飼育がかなり他と違つたとところが、あることからさして古くない時代に独立に起つたとする説もある。
——ドルギフ上掲論集六三頁。
- 39 シェトラウベ「牧畜民と遊牧民」(A. E. イエンゼン他著。大林太良、鈴木満男訳『民族学入門』社会思想社 昭三八、一二七頁)
- 40 今西 上掲書。
- 41 白鳥庫吉「アジア諸民族史論」(『アジア問題講座』民族・歴史篇(一)創元社 昭一四)。
- 42 莫東寅『滿族史論叢』人民出版社 北京 一九五八、一一八頁。
- 43 秋葉隆『満州民族誌』満日文化協会 新京 康徳五 二〇—二二頁。
- 44 もっとも、ツングースの中には、トナカイをもたず、沿海で漁撈・海獣狩猟をしているものがある。これをどう解釈すべきかは、かなり
の問題とされトナカイ飼育を獲得する以前に新石器時代移動して来た

ツングースであると考える学者もあるが、トナカイ飼育はツングースとサモエードにはじまるといふ説をとる学者の一人 M. T. Женин は、次のように見ている。すなわち、沿海のトナカイを飼わないツングースの文化要素は古アジア族のそれに近く、同時にその氏族構成上トナカイを飼っているツングースと密接な関係がある。そこでトナカイをもたないツングースは、実はツングース化された古アジア族であるとするのである。(ТУРБИТ; Там же. стр. 30)

45 ИСТОРИКО-ЭТНОГРАФИЧЕСКИИ АТЛАС СИБИРИ стр. 8-10.

トルコ系のヤクートが北極海沿岸にまで分布している点に注目してさらにこれについて考える必要があるであろう。

(金沢大学助手)

by the Gregorian Reform which insisted that the monarch was not derived from God, but from men who had been ignorant of God. On the side of kings two kinds of expressions of the criticisms against this radical Gregorian attack may be considered.

The first of the direct criticism against this attack was one by Anonymous of York, Hugh of Fleury and Ivo of Chartres, who took the reactionary position expatiating on the early medieval tradition of the theocratic kingship.

The second criticism appeared in and after the investiture contest, namely in the reigns of Henry I and II, and was based on the secular bureaucratic attitude which knew no sanction beyond the king's will (Richard Fitz Nigel and Ranulf Glanvill) on the one hand and on the philosophical attitude which admitted the moral qualities of the state along with the traditional hierocratic theory (John of Salisbury) on the other hand. This secularization of monarchy-conception was, I think, forced by the secularization of the monarchy itself after the end of the Gregorian Reform.

Fishing and Hunting People and Reindeer-breeding in Siberia

by

Shinji Saitô

A nomadic people is divided roughly into two groups; one who breeds horses, sheep and others in the arid region, the other reindeers in the frigid zone. These two groups have the fundamental difference; the former, contiguous to the humid region or oasis, has the relation to agriculture, and the latter, separated from the agricultural region, to fishing and hunting. In tundra and taiga, the original culture was formed on the basis of hunting of wild reindeers and fishing on the sea and river. Even after the commencement of reindeer-breeding, this cultural pattern did not change in substance. The reindeers had a marked tendency to be bred as a burden or draft animal in taiga and as a supplement for hunting and fishing in the tundra belt. The way how reindeer-breeding is originated has been largely unknown, but according to the Soviet ethnologists it is within the range of possibility that its origin in the southern Siberia under the influence of cattle-breeding in the arid region. The culture in the central Asia

including cattle-breeding may be thought to reach the northern side, in process of development, to assimilate the fishing and hunting culture in the taiga and tundra regions, and reindeer-breeding are combined organically. The southern-most habitat of reindeers roughly divides the reindeer-breeding region with hunting in the north from the horse-sheep-breeding region with agriculture in the south ; which is comparatively the case with Tungus over the north and south.

Studies through the Chinese history about Tungus as a race who brought reindeerbreeding to Siberia denote the possibility tracing back to the considerably old time ; it would be uneasy to corroborate the process of domestication of wild reindeers.